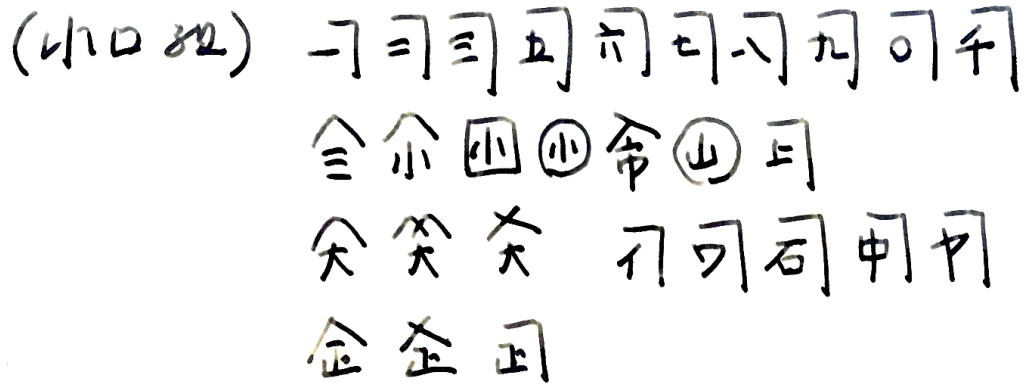
屋号 (やごう; Yagou)

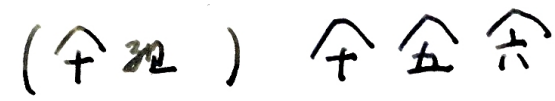
(小口組)



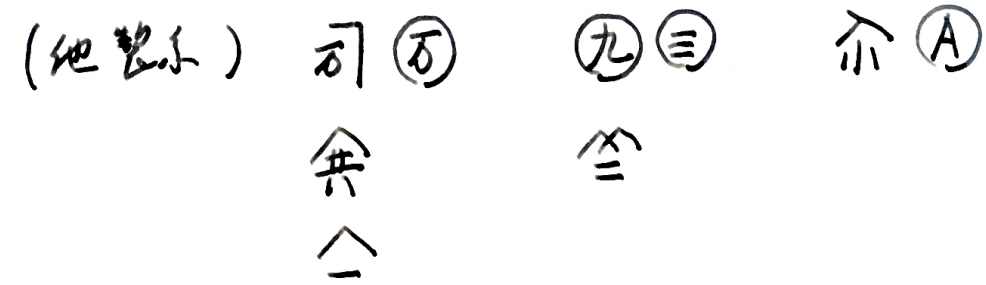
(司一後)



(今組)

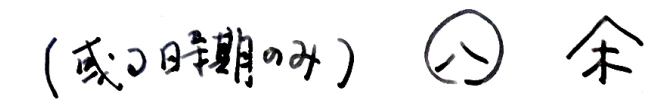


(他製小)

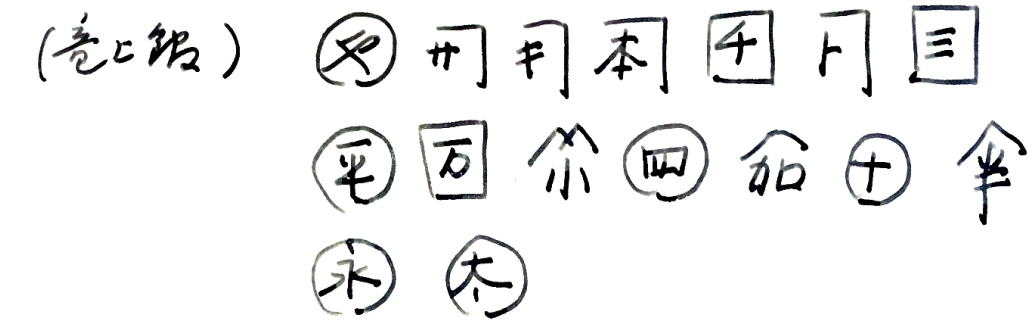


Yama-Dai やまだい	Iri-Yama-Dai いりやまだい	Sasu-Dai さすだい	Kane-Dai かねだい
Kane-San かねさん	Kaku-Ko かくこ	Maru-Ko まるこ	

(或る時期のみ)



(竜と銘)



ふるさとの製糸を考える会で総会と学習会明日

小口さんの講演は一般も歓迎

ふるさとの製糸を考える会（清水袈裟春会長）の定期総会と四月学習会は、二十四日（水）午後一時から、岡谷市公民館で行う。

総会は、午後一時から、七年度事業報告、会計報告、八年度事業計画案、予算案、役員改選などを議題に行う。

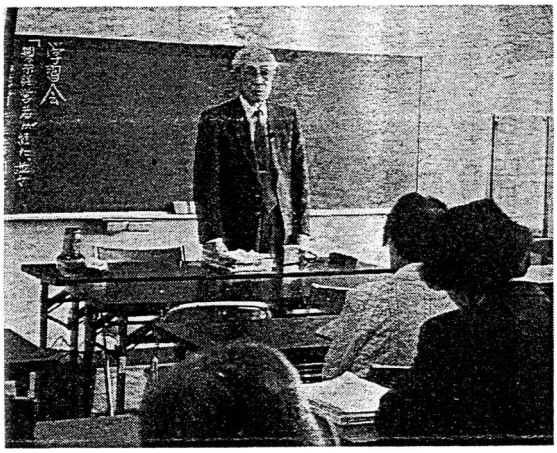
学習会は午後一時半から四時まで、かつての大手製糸、小口組の直系で、二十年来岡谷と東京を往復しながら製糸の研究を続けている、小口定一郎さんを講師に迎え「製糸経営者が経た並々ならぬ困難苦労と、生産向上の為の改良苦心」と題した話を聞く。学習会には、質問の時間もある。

一般の人も、学習会への参加は出来るので、ぜひ多くの聴講をと呼び掛けている。聴講無料。

岡谷市民新聞 2006 年 4 月

小口さんの講演聞く

ふるさとの製糸を考える会総会と学習会



ふるさとの製糸を考える会（清水袈裟春会長）は二十四日、定期総会と四月学習会を岡谷市公民館で行った。

学習会は、かつて大手製糸小口組の直系、製糸の研究を続けている小口定一郎さんを講師に招き、「製糸経営者が経た並々ならぬ困難苦労と生産向上のため改良苦心」と題した話を聞いた。

講演では、小口組の家系から始まり、小口組が個人会社で匿名組合であったことを解説。また、旧小口組資料を中心に、明治から大正時代にかけて苦しくなってきた経営状態や養蚕農家の状況など苦労や対策などを話したほか、資料をもとに春引きと夏引きの損、利益の研究結果を数的に表し、小口組の利益について分かりやすく説明した。

訪れた会員らは、製糸業が盛んだった岡谷に深くかかわる小口組の興味深い話を真剣に聞いていた。

岡谷市民新聞 2006 年 4 月 25 日 (講師; 小口定一郎)

Refer to a Oguchi Gumi related thesis.

明治 44 年 12 月 31 日、金吾の兄、茂は、東京へ出張中、病死した。弁三郎(2 代善重)より 2 才年長であり、将来の小口組を背負う二代目として期待されていただろう身を、あえなく、 30 歳で散らせた。定吉を始め、金吾兄弟姉妹の悲しみはいかばかりだったか。(Doc-5 p38/126)

定吉死去して、次男の金吾が家督を相続したのであるが、戸籍上には、いささか、廻り道の法律がある。今日の如く、結婚して一家をなせば、戸籍が独立するのとは違い、一戸主の下に親族は勿論、非親族をも加えて、一戸籍が作られる時代であり、家督相続は、その戸主たる地位の相続であった。

金吾は、結婚前の明治 43 年 11 月 20 日付、平野村 6250 番地へ分家届出で、定吉の戸籍から除籍された。この番地は明治 44 年 2 月、小口金吾名義にて新築起業した「かねいち製糸所」366 釜の所在番地である。本工場は権之助宅の隣接地に建設されたものであり、権之助名義とするのが自然の形であるに拘わらず、金吾名義とし、その地に分家の届出をしたことは、相当の理由が無ければなるまいと思われるが、今は不明である。(Doc-5 p39/126)

定吉の戸籍内にあった長男茂が明治 44 年 12 月 31 日死去したが、茂妻秀野、長女さきよは、当然、定吉戸籍に残っていて、従来通り、定吉の家の西側の家に住んだ。そして、そのまま、 10 年を経過したが、その間、かねいち組が小口組から分離し、かねいち製糸所はかねいち組に分与される等の変化があり、更に、定吉の健康関係もあってか、金吾は分家してからも定吉の家を離れなかった。大正 2 年 12 月栄子と結婚したのち、一時、翌 3 年 6 月起業した小口組彦根製糸所に常駐の任務に就いたが、大正 6 年、母きくが健康を害した関係から、岡谷に戻って、母亡き後の父定吉と共に生活した。

金吾の戸籍は、なお、分家のままで経過しているが、その間、茂の死去、かねいち製糸所はかねいち組への分与等の事情の上、大正 8 年隠居所を新築して住んだ定吉が健康を弱めた等もあってか、大正 10 年 4 月 20 日、金吾の分家を廃家して、定吉の戸籍に入籍の届出をした。

大正 10 年 10 年 24 日、定吉が死去した。事業に対する立場は、当然、金吾が継承するのであり、家督相続するのが自然であるが、法は、これをすなおに許さなかった。

即ち、定吉の戸籍内にある亡長男茂の娘さきよ(13 才)が家督相続人であるので、先ず、さきよが相続し、20 日ほど後に、さきよが金吾を家督相続人に指定し、自らは、隠居を届け出、金吾が、同日、指定家督相続人として届け出でた。(Doc-5 p40/126)

「小口組彦根製糸所(代表社員小口善重)」として登記しているが、その監理者として、結婚直後の金吾が常駐した。筆者は、ここで生まれて、 2 年ほどをこの地で育てられた。

しかし、大正 6 年、金吾の母きくが健康を害するにおよび、金吾は帰郷し、以後は、亡兄茂に代わって本部勤務を兼ねて担当工場の現業指揮に当った。(Doc-5 p44/126)

「春の赤字 夏に埋め」

ふるさとの製糸を考える会

学習会で小口さんが講演

岡谷市のふるさとの製糸を考える会（清水袈裟春会長）は二十四日、市公民館で学習会を開き、製糸研究家で、明治の大手製糸業小口組の子孫にあたる小口定一郎さん（東京都）が講演した。

製糸経営の苦労を題材にした講演で小口さんは、二―五月にした春引きは前年から保存した繭を使うこと、繭の値段は糸の値段を基準に買うことからリスクが大きかったことなどを紹介。春引きの赤字を、夏引きの黒字で埋めている状態で、春引きの危険は全面的に製糸家が背負ったという。それでもしていたのは、工女を一年間雇うといった雇用の安定のためだったと語った。

特に、大正、昭和の製糸は大きく、旧林家住宅などを残した製糸家林国蔵は、「明治の間に勝ち逃げした」例外的なケースとの見方を示した。



製糸経営について語る小口定一郎さん

長野日報 2006 年 4 月 25 日 (講師; 小口定一郎)



Family emblem (まるにたちおもだか)



Title of firm (屋号; Yago)　(山大; Yama-Dai)

Refer to a Family Tree of "Yama-Dai" (鶴吉 – 定吉 (曾祖父) – 金吾 (祖父) – 定一郎 (父))

平野村誌

昭和七年十月上梓

長野縣諏訪郡平野村役場藏版

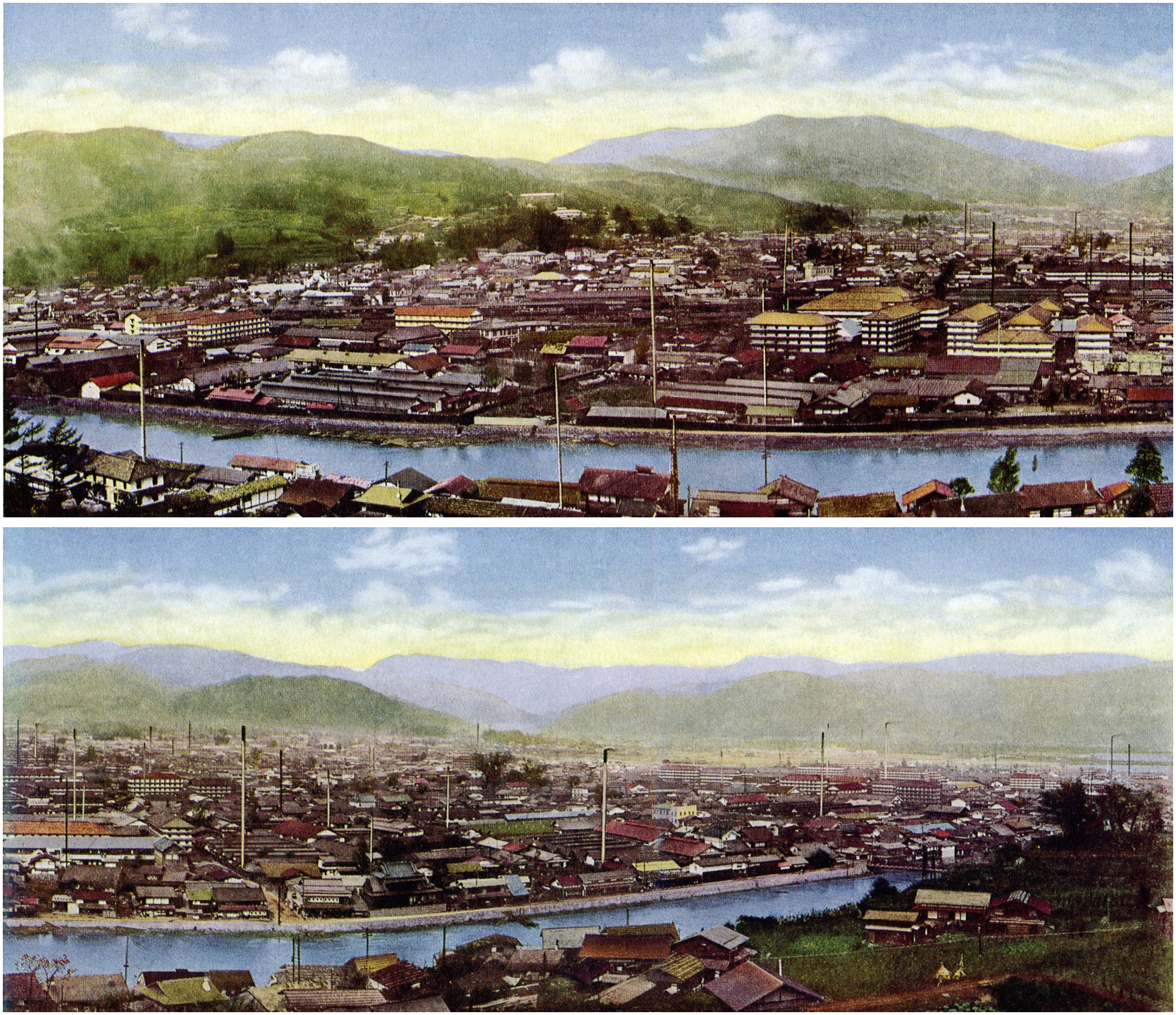
上卷

平野村誌

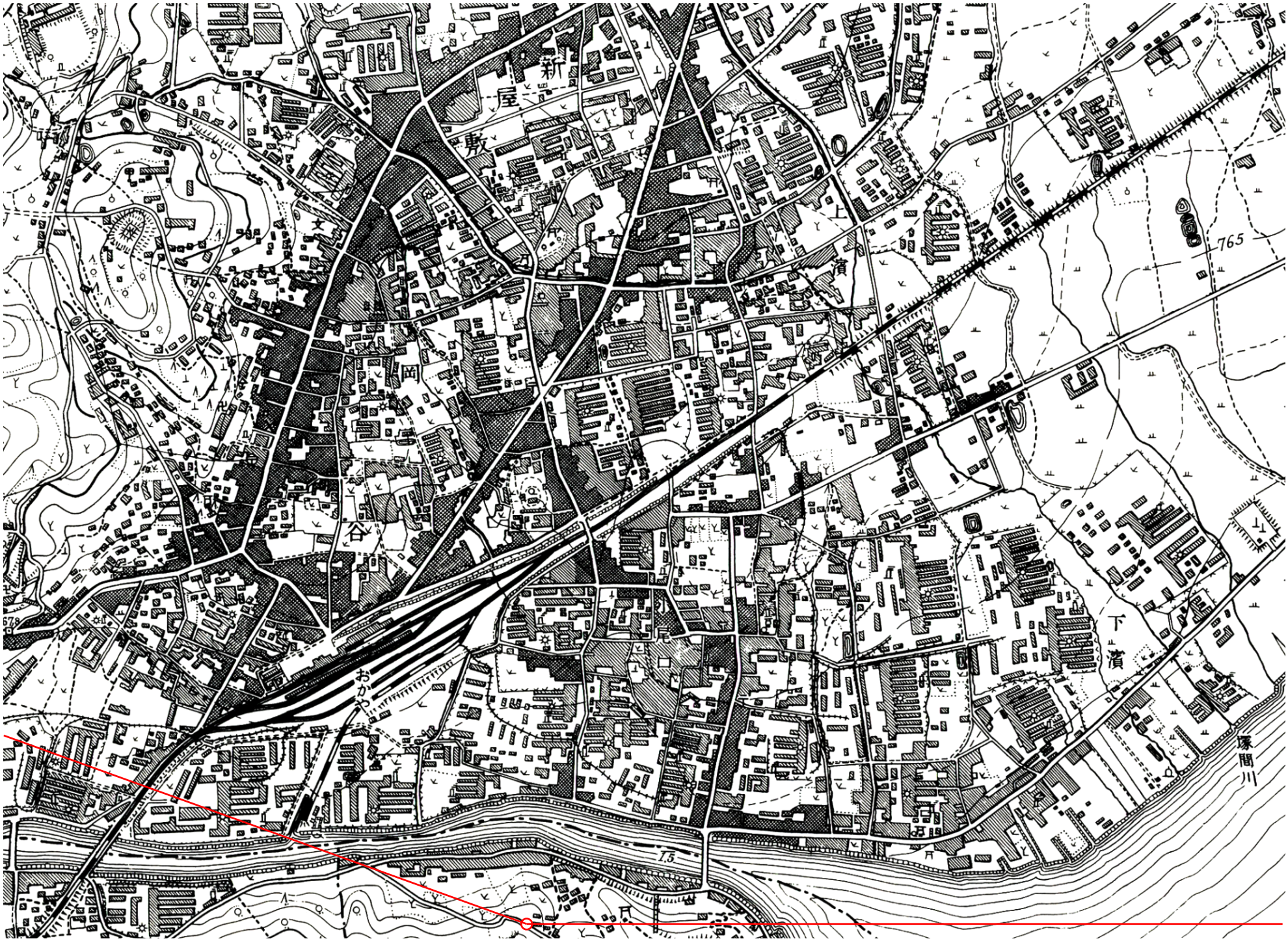
昭和七年十月上梓

長野縣諏訪郡平野村役場藏版

下卷



Upper: Left portion (Two comb-like silk-reeling mills, Okaya station, and Shoko Temple (照光寺)) Lower: Right portion (a road, bridge, and shrine)



O: Probable shooting location, Two lines: Probable shooting range (Refer to a full range of Hiranomura (Okaya) map published in 1928)